塩尻の文学

第９号
（桔梗ヶ原）

塩尻が舞台になっている文学作品を紹介します。

発行　2009年　10月　3日

万葉集

『万葉集信濃国歌について「文芸しおじり」』小口虎雄

奈良時代に書かれた万葉集に、塩尻市宗賀～桔梗ヶ原がうたわれています。その解釈について。

信濃なる　すがの荒野（あらの）に　ほととぎす　鳴く声聞けば　時過ぎにけり

『信濃の国のすがの荒野にほととぎすの鳴く声を聞くと、もう時季が過ぎて夏になった』意と斎藤茂吉は『万葉秀歌』に述べ、『この歌は民謡風なものだから、何か相聞的な感じが背景にひそまっている』と評している。島木赤彦は『都の人が信濃で、月日を経た嘆きを歌ったもの』と言った。折口信夫は民謡の中に、文学的なものがはいっていく過程を、この歌に考えて『ほととぎすの声に、時の推移を気づくといった興味の中心点が移って、都の人が地方に来て、我が旅の長さに驚く、といった文学的な空想に、展開したと考えられないこともない。これを文学的なものと決めてみると『すがの荒野に』という位置の取り方と『鳴く声聞けば』の迫らない憩いのある反省が、何となくこの歌に、日光や草葉の色までも思わせる』（万葉集総釈）と愛情を籠めて鑑賞している。すがの荒野は和名鈔で言っている苧賀（そが）ノ郷で、苧賀（宗賀）に発し桔梗原を含め、奈良井川西岸一帯にかけての広野であったろうと思う。『す』と『そ』は発音が移動し易く『そ』を『す』と方言発音したものと思われる。〔中略〕

小口虎雄（1900-1990）塩尻市生まれ。
塩尻短歌館の設立に努力をされました。

短　歌

『広丘の赤彦』　塩尻市立広丘小学校赤彦研究会

島木赤彦が広丘小学校校長だった頃の、学校資料や短歌の紹介がされています。

日曜一信（明治43～44年まで「南信日日新聞」誌上に時事感想として発表された短文）
四月二日
三月二十七日午後五時再び桔梗ヶ原の林中に遊ぶ、帰期明日にあり。旅装己に成って余す所四半日の無事、長きこと千年の如し。悠々たる客心帰程の迫れるを悲しむか。年移り人変じて風物の猶依稀たるを寂しぶか。暮色至れども帰らず、微雨至れども帰らず。鮮苔色己に没して樹間猶微白あり。静寂太古の如し。離別の情は斯くの如く静ならざるべからず、斯くの如く寂しからざる可らず。酒を置き高会して擾々たるが如き別離は、予の為めに何の意味を成さず。多謝すこの林あり。多謝すこの心あり。我と林と日没の静意に入って茫乎相自失す。〔中略〕

桔梗ヶ原の土となり　痩せたる松の木の下に　人を立たすに忍びんや
静かなる木よ残れかし　旅なる人よ去れよかし　愁ふる足よ歩めかし

寓に帰れば燈未だ点ぜず、炉辺の火鉢湯のたぎる音風に似たり。静を以て来り静を以て去る。桔梗ヶ原に感謝する只此の意のみ。　　注：岩波書店　赤彦全集第六巻より

『若山喜志子全歌集』若山旅人編

補遺　昭和六年
　　「筑摩野」を編みつつ
恋しかる桔梗ヶ原よこの頃は雀をどしの鳴りかをるべし
故里を遠く偲べば仄かなる絵を見る如しも美しくして
父母の墓所ばかりの故里と思へばかなしその山川も
広重の桔梗ヶ原の絵を見つつ遠つみ祖を偲びたるかも
いつかしき四方の高嶺を越えがたみあこがれ泣きし乙女なりしか
駅路（うまやぢ）の洗馬郷原をかぎろひのはたてにぞ見し今もしからむ
いち早くれんげうの花咲きしかばほのかにひとを思ひそめける
ねいり花咲き盛る頃はけうとくてをとめ心に人をおそれし
山裾の松本町をかぎろひのおぼめく果に見つつ恋ひしか

若山喜志子（1888-1968）歌人。塩尻市生まれ。
　若山旅人は息子。

ワイン

『林五一の生涯　桔梗ヶ原物語』藤田靖夫編

企業経営者の力量を発揮
〔中略〕　室戸台風によって落果した大量のコンコードであるが、これを消化するためには、有志や個人の醸造家では消化しきれないということがあった。こうしたことから、地元以外の大きな醸造所の誘致が考えられた。
この運動の中心になったのが林五一である。
大黒ぶどう酒と寿屋が原料を求めてきた機運をとらえ、彼は関係者を説得し、コンコードは生食用としての市場性はすでに乏しく、これを生かす道は加工原料であることを力説した。そして、コンコードの安定需要あることが地域農家の経済安定につながる、というのが彼の信念でもあった。
こうした五一の勇気とねばり強い説得は、農家に大きな恵みをもたらしたのである。

子供たちにお駄賃をやって害虫駆除
さて、桔梗ヶ原に消毒薬がなく、本格的な害虫駆除の方法もなかった昭和初期まで、人々は果樹についた害虫を手で払い落とし、これを捕殺する以外になかった。木の根元に落ちた害虫を拾い集めるのも人の手によらなければならないが、果樹づくりの仕事は次から次へと追われるようにあるため、ゆっくり虫を拾い集めているヒマはない。
五一は、村の子供たちにこの仕事をたのむことにした。「○匹拾ったら、ごほうびをあげよう」ということにした。子供たちは一生懸命虫を拾い集めて、五一おじさんの所へ持って行く。すると五一は、「ほほう、これはたくさん拾ったね」とばかり、何がしかの小銭を与えた。〔中略〕

林五一（1890-1992）岡谷市生まれ。
　林農園五一ワインの創業者

戦　い

『怨霊孕（おんりょうはら）む』　西村寿行

桔梗ヶ原の戦いで、宗良親王軍の熊谷義直と叔父貞正は戦いから退くことにしました。生きのびる道は、僻地の郷主を襲って押領することでした。

第１章　白狼の怪

南朝、北朝の和暦がある。

南朝では正平十年八月二十日。

北朝では文和四年八月二十日。

早朝、信濃国松本在の桔梗ヶ原において戦闘が繰り拡げられていた。

攻めたのは後醍醐天皇第八皇子・宗良（むねなが）親王であった。

攻められたのは信濃守の小笠原長亮。

天下分け目の戦いではなかった。

この時にはすでに南朝の敗北は覆いがたいものになっていた。新田義貞が討ち死にし、北畠親房が敗死し、楠正成が討ち死にしていた。

宗良親王にとっては最後の決戦であった。

宗良親王は幼少より出家していた。法名を尊澄（そんちょう）という。天台座主であった。僧籍を捨てたのは、後醍醐天皇を救けるためであった。数珠のかわりに剣を杷（と）って立った。文字どおりの東奔西走であった。戦（いくさ）また戦に、寧日なかった。

だが、盟友、新田義貞が死んだ。

南朝の崩壊である。

宗良親王はこの桔梗ヶ原の戦いに死を覚悟していた。生きて詮ない身であった。幾多の戦いに散って逝った南朝武士（もののふ）の冥福を、自身が刃（やいば）に仆（たお）れることで、祈ろうとした。〔中略〕

西村寿行（1930-2007）小説家。香川県生まれ。

『善光寺奉還　上』　前澤山歩

戦国時代の人々の暮らしとともに、歴史上の戦いの様子が細かく描写されています。

牧の邑

〔中略〕ここは、峠から北へ三里ほど下った小笠原家の領する筑摩軍埴原郷内牧といって、地元ではこの一帯を『片丘』と呼んだ。

大永八年（1528）四月、野は雪解（ゆきげ）の水音とともに若草の季節を迎えて、浅田作兵衛の厩では今日も栗毛の木曽駒が産まれた。

別れ路

〔中略〕「来た！」下西条の伊那口に、雲霞の軍勢が湧いた。不気味な地響きとともに、血のように赤い甲冑で身を固めた騎馬軍が筑摩野に群れている。物見小屋からは黒雲の狼

煙があがり、寺々からは狂った半鐘が打ち鳴らされた。五郎太らの守る田川橋の柵前を軍団は、嘲るように駒を駆って桔梗ヶ原の陣場へと抜けてゆく。

「合戦は桔梗ヶ原じゃあ！桔梗ヶ原じゃあ！」

前澤山歩（1949-）小説家。松本市生まれ。

『塩尻の伝説と民話』　塩尻史談会

圭嶽珠白禅師（塩尻編）

桔梗ヶ原合戦の最中の出来事である。おりしも甲軍より、大声にて呼ばわる者があった。〔中略〕千軍万馬入乱れつつあるこの戦さの巷をよそにして、座禅三昧に耽っているのである。武士どもは異口同音に言った。これは唯者ではあるまい。

耳塚（塩尻編）

武田信玄と小笠原長時との桔梗ヶ原合戦のとき、討死した将兵の耳を葬った所と一般にいわれているが、あるいはもっと古く、古墳としての塚かもしれない。

武田信玄旗立一位の樹（片丘編）

片丘南内田の大宮八幡社に、樹幹のまわり三メートル二十センチの一位の樹がある。〔中略〕信玄は自分の所在地を示すために、大宮八幡社（当時は大宮八幡宮と言い、南に向いていた）の正面にある一位の樹に旗をたてた。

平出の乳松（宗賀編）

激戦小半日、小笠原勢を敗退させた勘助が、取るものも取りあえず塚の上へ引き返してみれば、くだんの赤児は、松の葉からしたたり落ちる雫を、あたかも母親の乳房から出る乳のように口に含んで、喜々としていたという。

玄蕃之丞

玄蕃之丞（ 玄蕃之丞編）

玄蕃之丞といえば、誰知らぬ者もないほどの、当地方の有名な古狐であった。草茫々たる桔梗ヶ原を住処として、夜となく昼となく、変幻出没極りなき活動をしたとのことだ。その活動について数々の話が伝えられている。

〔中略〕また、彼は大名行列を真似ることが好きだった。下に下にと、威儀を整えて、木曽路を下ったことが幾度だったか知れない。
〔中略〕そこで、何んとかして玄蕃之丞を捕えようと、各宿々でくふうをこらしていたが、贄川宿では、鼠の天ぷらを細口の壷に入れて待っていた。

▲▼▲　図書館は友だち・いつでも・どこでも・誰にでも　▲▼▲

参考資料（塩尻市立図書館でお借りしました。）

- 「文芸しおじり」第一巻第１号　塩尻文芸の会
- 「広丘の赤彦」塩尻市立広丘小学校赤彦研究会
- 「若山喜志子全歌集」若山旅人編　短歌新聞社
- 「林五一の生涯　桔梗ヶ原物語」藤田靖夫編
- 「怨霊孕む」西村寿行　講談社
- 「善光寺奉還　上」前澤山歩　信濃毎日新聞社
- 「塩尻の伝説と民話」塩尻史談会